

ジェイムズ・ホッグ

10 リトル・ピンキー

リトル・ピンキーがキルボイの門へやって来た
万聖節のことだった
女の子たちはピンキーを出迎えた
何を言うのか聞きたくて

というのも 野原で踊る子らのうち 5
ピンキーほど小さなものはなく
この世に生まれたもののうち
ピンキーほど美しいものもない

顔のつくりは美しく 10
額にかかるその髪は
月から輝き落ちる
金色の流れのようだった

顔に浮かぶ微笑みは 15
見るも麗しく
天を彩る空色も
ピンキーの瞳の色にはかなわない

頭の中から踵まで七十センチほど 20
それでも 見るも麗しい
どんなに着飾った女も
ピンキーにはかなわない

どこから見ても
高貴な女たちの
姿や気品を
兼ね備えていた

男爵が野原へやって来て 25
ピンキーの手を取り話しかけた
「ようこそ リトル・ピンキー
麗しのスコットランドの花

わが家へおいでください ピンキーよ
美しい我が城へ どうぞおいでください 30
我が愛しの人として
夜も昼も愛しましょう」

「いけません いけません 男爵様
そんなことは許されません
私と戯れなどすれば 35
きっとあなたは天国へはいけません」

「ピンキー 逃がすものか
愛とは抑え難きもの
乙女の魅惑的な愛の喜びが
魂を汚すことなどあるものか」 40

「無理やり手にいれるなど おやめください
辛抱せねばならぬ時もあるのです
私の身も心も手にしたお方は
二度と乙女に手を出せぬでしょう

ただあなたに歌をうたいましょう 45
妖精の輪舞を舞いましょう
あなたとかわいいお嬢様方が
上手に踊れるようになるまで」

さてここで私がリトル・ピンキーの歌を口にすれば
災いを招くことになるだろう 50
耳に響く歌はきれいだが
この世のものではないのだから

ただ娘たちがおそわった
歌のリフレインはこうだった
「まわれ まわれ 七回まわれ 55
妖精の魔法の輪」

一周目をまわるリトル・ピンキーの踊りは
優しく柔らかく美しかった
二周目を踊るリトル・ピンキーの足元は
もう誰にも見えなかった 60

三周目を踊るリトル・ピンキーの姿は

ちらちら輝く光に見えた
まるで暖かく晴れた日に
弱い光が踊るよう

まわりながら跳ねながら うたい続けた 65
野原に集う皆の周りで
踊りの光が頭上に輝くかと思うと
足元の草に触れるのだった

男爵が飛び跳ね始めた 70
じっとしてはいられなかった
小さな娘たちと手に手を取って
輪の中に加わった

くるくるまわり どんどん速く 75
妖精の輪は飛ぶようにまわった
踊り続けているうちに
踊りはいよいよ激しくなった

リトル・ピンキーは輪の中で 80
五月の^{のみ}蚕のように飛び跳ねた
ピンキーが跳ねるたび
男爵は叫んだ「いいぞ」

妖精の輪は くるくるまわり
皆は高く低くうたった
妖精の輪は くるくるまわり
皆はぴょんぴょん飛び跳ねた

そのうち男爵は喘ぎ始めた 85
その目はうつろ
手足は全く動かない
息も絶え絶えに
草地に倒れた体は
まるで鉛のようだった 90

それでもピンキーが
陽の光を背に跳ねるたび
男爵は手足を何とか動かして
切れ切れに言った「いいぞ」

死に際に手足はだらりとたれた
 憐れみも祝福も受けることなく
喉の奥でごろごろと
 最期に言った「いいぞ」

娘たちは踊って跳ねた
 狂ったように 淫らに
愛も憎しみも 生も死も
 全てどうでもよいことだった

くるくるまわり 飛ぶようにまわった
 翼を広げた七羽の小鳥のように
死んだ父親のことも この世のことも
 これっぽっちも気にせずに

村人が集まってきて
 驚き惑い 目にしたものは
死んだ父親の周りで踊る娘たち
 そこにピンキーの姿はもうなかった

司祭が言った「ああ なんてこと
 魔術の気配がするぞ
さあさあ すぐに離れろ 美しい娘たち
 こんな罪深き行いは許されぬ」

娘たちは妖精の輪から外れた
 狂ったような動きは止まったが
起こったことは
 何一つわからなかった

司祭は輪の中に走り込み
 男爵の頭を持ち上げて
死体を運び出すようにと
 六人の若者たちに呼びかけた

リトル・ピンキーが真ん中に
 太陽のように美しく立ち現われて
歌をうたい くるくる踊ると
 たちまち皆の悲しみは消え失せた

司祭は飛び跳ね始めた

力いっぱい頭を振った
突如現れた小さな娘のしなやかな手足に
すっかり心を奪われた 130

くるくると 死んだ男爵の周りを
時に跳ね 時に叫び
司祭と六人の若者たちは
まるで回転する糸車のようにまわった

皆は声のかぎりに 135
リトル・ピンキーの歌をうたった
リフレインの歌詞の他は
ここで口にするのは控えましょう

ステップを踏んで 140
ピンキーの身体が跳ねると
「もう一度 もう一度」司祭は声をはりあげた
「なんと美しい

もう一度 もう一度 もう一度 もう一度」
まるで狂ったように司祭は叫んだ
「ああもう一度跳ねて見せておくれ 145
愛ゆえに死んでもかまわない」

くるくると 死んだ男爵の周りを
皆は飛び跳ね 踊りまわった
くるくると 死んだ男爵の周りを
互いにぶつかり 跳ねてまわった 150

そのうち司祭の息があがり
喉がヒューヒュー鳴り始めると
まるで太った雄牛のように
草地にばたりと倒れた

死に際に 手足はだらりとたれた 155
その目はうつろ
「もう一度 もう一度」と
喘ぐやいなや 息絶えた

国中のものは皆
祭司や司祭のもとに集った 160

すべての教会が祈りをささげ
すべての聖歌隊が歌をうたった

リトル・ピンキーが
キルボイの城に居座って
屋敷の部屋の全ての鍵が 165
ピンキーの手の中にあったから

噂は東へ西へと広まった
ソルウェイ湾からクライド川に至るまで
噂はクラウデンの側^{そば}に住む
ジョン司教にまで伝わった 170

司教はキルボイの城へと向かった
男爵の娘たちを救うため
あの妖精をおびきだし
紅海の波間に沈めるため

司教はキルボイの門に着くと 175
かけ金をがたがたさせた
リトル・ピンキーは 誰より早く
門を開け司教を招き入れた

「小さな妖精よ お前に聞きたいことがある
とても大切なことなのだ 180
お前はいったいどこからやって来た
いったい誰の差し金でやって来た」

「遠い国からやって来ました
穏やかできれいなところから
天の川の星々が 185
足元の遥か彼方に見えるところ

地上をあちこち彷徨^{さまよ}いました
乙女たちの魂を救うため
乙女たちは生まれながらに
愛と悲しみと罪に囚われているから 190

夜も昼も黄昏時も
森や木立の側を彷徨^{さまよ}いました
ああ 乙女たちの清らかさと自由をまもるため

どんなに私が苦勞してきたことか

野原で踊る乙女たちの
波打つ髪の上に座って 195
赤らむ頬を見ていました
輝く瞳を見ていました

乙女たちの耳にささやきました
愛のあらゆる罨の潜む夢を 200
若く希望に膨らむ胸を
天から降る露でなだめました」

「邪悪な妖精よ
この娘たちを見ろ 205
お前は皆の頭から父親を追い出して
牧者の手を振りほどかせた」

「あの父親はろくでなし
人間の面汚し
城に七人の愛人を囲い
恥の館にしてみました 210
あの太った司祭も大悪党
彼らの所業など口にするのも忌まわしい

「この娘たちは
花を咲かせるその前に 215
乙女の証の白い衣と絹のリボンを
失っていたことでしょう

だからジョン司教様 ひどいことをしたからと
どうか私を責めないで
二人を死に追いやったのは
二人自身の罪なのだから 220

だけど司教様
貴方は誠実で善良なお方ですから
私のこの役割を
喜んで貴方に委ねましょう

優しく穏やかな乙女たちには 225
私がすべきことがたくさんあるのです

ここ地上の男たちはあまりに邪悪で
女たちはあまりに弱いから

ジョン司教様 天の妙薬を
貴方の目に塗りましょう 230
今とは違う耳で聞き
今とは違う目で見ていただきましょう

内なる^{かしこ}畏い魂で
善と悪とを見分け
どのような者たちに囲まれて 235
どのような世界に住んでいるのかご覧ください」

そうしてピンキーは 天の妙薬を
司教の目と耳に塗った
決して決して枯れることない
天の花から作られた妙薬を 240

司教はあたりを見回した
何が見えるかと思いながら
「これはなんだ これはなんだ」善良な司教は叫んだ
「いったい何が起こったのか

我が身はぐっすり眠って 245
恐ろしい夢の中にいるのだろうか
いやいや それとも 我が身に似つかわしく
死んで天に昇ったのか

ありとあらゆる姿かたちの霊が
おびただしい数の幽霊や悪魔を伴って 250
行き交うのが見えた
ああ なんと恐ろしい

どこだ リトル・ピンキーはどこへ行った
こんな苦しみには耐えられない
この薬を目からふき取って 255
再びこの目を閉ざしてくれまいか

こんな霊たちに囲まれて
どうして平穩に暮らせようか
互いに相手のことなど

- ろくに知りもしないのに 260
- リトル・ピンキーは飛び去った
谷の奥へ奥へと
^{よこしま}邪な男たちのたくらみから
乙女たちをまもるため
- いろいろな色の霊たちに囲まれて 265
善良なジョン司教はただ一人残された
周りには黒の霊 白の霊
緑の霊 青の霊
- 死すべき宿命^{きだめ}の人々の中 270
霊たちがうろつくさまは
枝に群れる鳥のよう
大地に蠢^{うごめ}く人のよう
- 乙女にはそれぞれ
五月の花のように美しい守護者がついていた
司教のそばには黒い犬がついていて 275
決して離れようとしなかった
- 悪魔を二匹三匹と
連れるものもいた
悪魔たちは乙女や聖人に
見るも恥^{たわむ}ずべき戯れをしかけた 280
- 司教のそばの犬 大きな黒い犬は
主の顔をじっと睨^{にら}みつけた
その顔は陰鬱で
ずる賢そうだった
- 司教には堪えがたい生活だった 285
なんともみじめな日々だった
説教もできず 祈ることもできず
眠ることすらできなかった
- 恐るべき呪いのため
聖なる教会の中でさえ 290
眼前に繰り広げられるのは
口にするのもおぞましい光景

仕立て屋の目の前に
織物を広げて見せるように
霊がこっそりと司教の心のうちに忍び込み
あらゆるものを見せはじめた

295

あるものが^{ていしん}廷臣たちの目の前で
重たい財布がちらつかせると
^{ていしん}廷臣たちは大喜びで
国を売り払う

300

あるものが退屈な男たちに向かって
カードを出し さいころを振ると
男たちは 司教の目の前で
大声をあげて博打に興じた

あるものは着飾った淑女に
高価な絹や繻子で言い寄った
あるものは邪な誓いで 嘘の涙で
あるものは高価な贈り物で言い寄った

305

あるものは年老いた^{おとめ}修道女に
若い情熱をささやいた
ああ 教会の中で目に入るもの半分は
罪深く異様なものだった

310

ジョン司教は幾度も目を閉じて
目の前の光景から逃れようとした
戯れがあまりに滑稽で
つい笑いそうになったから

315

心の奥に隠しておいたどんな秘密も
明かされてしまった
幾多の霊たちが 司教の目の前で
どんな思いもさらしてしまうのだ

320

司教は死を願った 摩訶不思議な呪いをかけられて
休むこともできない
呪われた目で
不思議な世界を見て彷徨った

人とは死すべき身体に 325
不滅の魂を宿すもの
死の門をくぐれば
死すべき身体は捨てねばならぬ

そこで善良なジョン司教は懸命に願った 330
この命など尽きてしまえと
霊や人と交わる命はいらぬ
唯一のものと交われぬのなら

あの大きな黒い犬は 335
いつでも側に控え
祭壇の前ですら離れずに
司教の顔をじっと見つめていた

司教は家に帰ると横になり 340
すぐに死者の列に並んだ
あのキルボイのきれいな乙女たちは
一人残らずいなくなった

七年の長き時が
にわか雨の様に瞬く間に過ぎ去ると
ある万聖節に
リトル・ピンキーが帰ってきた

夕日が沈むころ 345
リトル・ピンキーのうたう歌が
老いにも若きにも命ある限り
忘れられたことはなかった

話されたこと なされたことを 350
知るうた人はない
再び美しく咲き誇る
キルボイの美しい乙女たちのほかには

乙女たちは異界へ行ったと 355
思う者もいるだろう
だが乙女たちが味わったのは
この世の幸せだった

それでも荒れ地の谷間では多くの話が

美しい詩と妖精の歌が
ピンキーの歌のリフレインが
万聖節にはこだまする

360

(鎌田明子訳)